

仙林寺だより

NO. 51
編集・発行
松田正貴

行事報告

観月会

十五日は、十三夜という事で観月会を催しました。道元禅師様観月の図の掛け軸を拝しながらお月様を仰ぎ見る趣向で、坐禅会々員の皆様にも声をお掛けしました。禅師様は、多くの歌を残した事でも知られますが、特に「観月」を題材にした名句を詠んでおられます。坐禅の御詠歌「浄心」にも「濁りなき心の水にすむ月は 波も砕けて光とぞなる」とあります。月は本来私達の心の中にある仏性、清らかな心を表しており、坐禅の心境を濁りなき心の水に例え、そこに宿る清らかな心は、煩惱の高波にのまれる事無く、その輝きを失わないとの意味でしょう。当日はあいにく天候不順でお月様は臨めませんでした。が、仏道に励む皆さんの心には、しっかりと明月が禅心を照らしていたように感じました。月は草の露にも、一滴の水にも宿るとの言葉に励まされながら、おひらきとなりました。

保小六年生学習発表会

十九日、六年生の学習発表会が、仙林寺を会場に行われました。六月に坐禅体験や鎌倉期仏教のお話をさせて頂きました。その学習を元にまとめたものを発表すると言う事で、校外でのしかもお寺での授業が決まったようです。今回は、父兄も一緒に八十名の大所帯です。まずは二班に分けて、発表する班は法雲閣で、坐禅体験は本堂でと学習型・体験型のコラボレーションです。

子供たちには判り易く、ご父兄には興味を持って頂くようにと、お話の内容を工夫したつもりでしたが、如何だったでしょうか。また、坐禅会々員のゴージャス松野氏も飛び入り参加、鳴らし物や警策（きょうさく）を担当して頂きました。「わく何でゴージャス松野さんがあるの」第一声は父兄よりも引率の先生でした。

ところで本題は坐禅です。「身体は心を入れる器」身体の扱い方で、入れる心は案外変わるもの、形の整った器には、やはりその形に沿った心が入るようです。「水は方円の器に随う」の禅語もあります。心が四角になるのも丸くなるのも、入れ物が大切なようです。

寺小屋「芋煮会」

三十日（日）、恒例の芋煮会です。今回は新メニュー「ジンギスカン」が登場、本場北海道より空輸された生ラム肉の評判も上々、お寺と羊肉はミスマッチ等と言っている場合ではありません。一口はあろうかと思われ、食材もあつという間にたいらげます。芋汁は昨年リクエストがあつた、里芋からジャガイモに変更、こんにやくもかなり多めに入った変則的な汁でしたが、要は子供達の嗜好が最優先、自分で握ったかなり塩辛いおにぎりも自己責任でお腹の中へ、新会員イギリスからの帰国子女みらいちゃんも満足でしたか？



なせおにぎりは美味しいのかの問いに「人間の指で握り締めて作るから」と答えています。炊き立てご飯の感触を味わい、まあるいその形も味わう。不揃いも人の肌味わい、三位一体の味だからでしょうか。

【お布施のご報告】新潟米 宮内氏 きのこ・野菜 としこさん 羊肉 北海道 英嗣さん人的布施 ご父兄、ボランティアの方々。今回も多くの方々にご協力を頂きました。お礼申し上げます。

「窓の月」

ネットビジネスや ファンド、このころ若手経営者が世間を賑わしているようです。勝ち組、負け組等と言う好ましくないはやり言葉も、女性の婚期だけでなく、ビジネスにもあてはまるとすれば、迷わず前者の組だとして自分で手を挙げるのではないのでしょうか。只、結果論としての住み分けを云々するこの言葉も、経済的価値観を優先する線引きには何だか寂しい思いしか残らない気がします。

ところで、清貧の禅僧で有名な越後の良寛さんは、「盗人にとり残されし窓の月」という有名な詩を残しております。月がこうこうと照るある寒い晩に、良寛さんの破れ庵に泥棒が入ったそうです。勿論盗るものなどあるはずもなく、困った拳句事もあるうに、くまっていた布団をはがそうとします。良寛さんは何も無いこんな所に物盗りに来るのだからよほど困ったの事だろうと、寝返りをうつ振りをしてそつと布団を差し出すのでした。そしてその泥棒が去った直後に詠んだのが先の句なのだそう。ブラウン管に映る勝ち組？と言われる若い経営者の獲物逃さぬ眼は、秋の冴え冴えとした月を眺めても宇宙ビジネスという黄金色の光と捉えるようでは、餅つきうさぎの影絵にしか見えないうでは、所詮負け組みでしかないのでしょうか。分け隔てなくその光を与えてくださるお月様も、照らされる側の目にかかるフィルターで様々に映るようです。「盗人にとり残されし窓の月」良寛様には、フィルターなしで観る事が出来る心の月が宿っていたのでしよう。